
君子殉凶リリカルBASARA

なるち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君子殉凶リリカルBASARA

【コード】

N02160

【作者名】

なるち

【あらすじ】

決して表沙汰になる事は無い裏事情。それはJS事件にも存在していた。

(前書き)

凶王様が通ります。

後にジエイル・スカリエツティ事件、もしくはゆりかご事件などと呼ばれる様になる大事件が今、最終局面を迎えている。

普段は時空管理局本局所属で次元航行部隊に同行しており、ミッドチルダ地上に展開する部隊・機動六課に出向中のフェイト・T・ハラウン執務官。管理局とは協力関係にある聖王教会に所属するシスター、シャツハ・ヌエラ。

この二人は今現在、ミッドチルダ東部にある森林地帯にて発見されたスカリエツティラボ攻略作戦に参加している。しかしフェイトとシャツハは敵の策略により分断されており、それぞれ独りきりで戦っている状態にある。

「ヴィンデルシャフト！」

「くっ」

シャツハがトンファー型のデバイスで戦闘機人の1人、セインに殴りかかった。だがセインは左へ大きく跳躍して距離を取ると、そのまま一定の距離を保っている。

「1人の！」

「やられる訳にはいかないんだ！」

この2人の戦闘が始まってからどれほどの時間が経過しただろうか。セインが防戦一方であるため未だシャツハに有効打が出ず、戦況が変わる事は無い。

シャツハは焦っていた。このラボに居る戦闘機人は目の前の少女1人であるはずがない。間違はなくスカリエツテイの護衛の戦闘機人がある。それが1人なのか複数なのかは分からないが、フェイトが1人スカリエツテイと戦闘機人相手に孤軍奮闘している事は間違いない。

ただそれだけであればSランク魔導師のフェイトを心配する必要などなかったが、この場所は高濃度のAMFアンネキワシタルドで包み込まれている。となれば莫大な量の魔力消費は避けられない。フェイトがフルドライブ、オーバードライブを使用すれば尚更だ。

だから一刻も早く助けに行きたいのだが、どうにもセインを攻略出来ずにいた。そんな場所に1つの影が近付いて来ていた。

「……、何だお前は!？」

「邪魔だ、退け。用が有るのはスカリエツテイだけだ」

シャツハとセインの前に現れた男は白髪に漆黒の鎧を纏い、鎧と

同じく漆黒の刀を左手に持っている。その男が放つ威圧感というか、むしろ殺気に近いモノをシャツハもセインも感じていた。感じているのは恐怖。その一言に尽きる。気をしっかり持っていなければ腰を抜かして尻餅をついてしまいそうになる。

何とかそうならずには済んでいるものの、この男が現れてから手足の震えが止まらず、背中を嫌な汗が伝う。それでもセインは何とか声を絞り出す。

「そ、そう言われておとなしく・・・、ど、ドクターの所へ行かせると思ってるのか？」

「そうか。ならば許可の下、貴様を懺滅してやる」

「や、やれるもんなら」

セインが言葉を絞り出している最中、男の姿が消える。それをシャツハが認識した時、セインは既に血まみれで倒れており、その後方には男が立っていた。

「なっ!?!」

驚きで微動だに出来ないシャツハをよそに、男は先へと歩いていく。その様子を目にしてハツと我に返ったシャツハは慌てて男を追いかけた。

「ま、待って下さい！貴方は一体？」

「黙れ。女、お前は聖王教会所属だな？」

「は、はい。そうですが」

「ならば用は無い。失せろ」

「で、ですから貴方は一体誰なんですか？それにいくら戦闘機人相手でも殺害するなんて！」

「失せろと言ったはずだ。それ以上騒げば貴様も懺滅してやるぞ」

「っ！？」

男が放つ殺気に気圧されてシャツは口を開くどころか、立っている事すらままならない、意識を保っている事すらままならない状態に陥った。それは余りに恐ろしく、最早人とは思えない存在にさえ見えた。

男が立ち去った後、とてつもない恐怖から解放されたシャツは脱力してその場にへたり込んだ。突然開放されたせいかわ、シャツは自分でも気付かない間に失禁しており、呼吸も激しい運動後の様にとても乱れている。

それらが、あの男の放っていたさっきの凄まじさを物語っていた。

長く美しい金髪をツインテールにし、その身を黒いバリアジャケツトで覆った女性、フェイト・T・ハラオウンは今非常に追い詰められていた。

その理由の一つは自身がスカリエッツィが使用した何らかの拘束魔法によって、赤い糸の様なもので身体を絡めとられていること。

もう一つは、魔力残量についてだった。オーバードライブ・真ソニックフォームとライオットザンバーを起動させれば脱出は出来るが、その後が続かない。脱出してスカリエッツィを捕える事が出来たとしても、ゆりかごで戦う仲間の救援に行く事が出来なくなってしまうのだ。

そして最後に、スカリエッツィのエリオやキャロたちはフェイトが自分の都合のいいように育てたという言葉によって精神的にも追い詰められていた。

（このままじゃ・・・でもどうすれば）

「ククク、観念したまえ。フェイト・テストロッサ」

「観念するのはお前だ」

「ん？」

フェイト達の下に現れたのは、少し前にシャツハたちの前に現れた白髪に漆黒の鎧の男だった。新たな参戦者にスカリエッティと彼の護衛の戦闘機人、トーレとセツテは警戒心を強めている。

「何だ貴様は！局の魔導師か？」

「スカリエッティ、投降しろ。拒否は認めない」

「君が誰だか知らんが、君に認めてもらうつもりはないな」

「投降しないとということか」

「そう聞こえなかったのならば謝ろう」

「ならば許可の下、貴様を懺滅してやる」

懺滅する宣言をした男は一步、また一步とゆっくりスカリエッティに歩み寄って行く。当然、トーレとセツテが行く手を阻むように立ち塞がる。

拘束されて動く事が出来ないフェイトは、事の成り行きをただ見守っているしか出来ない。

「フェイトお嬢様の前にまずは貴様からだ。IS発動！ライドインパルス！」

「IS、スローターアームズ」

トーレの手足に紫色の8枚の羽根に見えるエネルギー状のモノが出現し、セツテも手にしているブーメランブレードを構える。2人が男に攻撃するために今まさに突撃を行おうとした瞬間、男は一足飛びにトーレに斬り掛かった。ライドインパルスを発動させていたお蔭で反応する事が出来た彼女は、両腕を交差させインパルスブレードで漆黒の刃を受け止めた。

「ぐっ!?!」

斬撃を受け止められた男は直ぐ様飛び退くように下がった。トーレとセツテはそれをチャンスと見たのか、自分たちから距離を詰めて同時に斬り掛かった。

「おおおっ!」

「はぁぁあっ!」

「遅い」

2人が刃を振り下ろした瞬間、男は2人の視界から消え失せた。
2人の斬撃は当然ながら空を斬るに終わった。

「慙悔」

トーレとセツテの後ろでは男が漆黒の刃をゆっくりと鞘に納めていた。納め終わると同時に、おそらくは技名であろう言葉を呟くように口にした。

「うあっ!?!」

「ぐああっ!?!」

その直後に発生した居合いによる無数の斬撃がカマイタチの如く、2人をこれでもかというくらいに斬り刻む。あまりに早すぎるそれは、最早何撃入っているのか知ること叶わない。

居合いの嵐が収まった後、そこにはトーレとセツテが全身から血を流して倒れている。その傷は深く、おそらくはもうすでに絶命しているであろう。

「いやはや、私の傑作をこうも容易く撃破してしまうとは。一体君は何者なのかな?」

「これから死ぬお前に名乗っても意味などない」

「そうか、残念だ。だが私を殺したとて、私は消えない。1カ月で私の分身が現れる」

「ならばその時にまた殺す・・・、ただだっ！」

男が叫ぶと同時に彼の姿は消え、足元からはスカリエッツィの拘束魔法である赤い糸状のものが出現していた。しかし早すぎる男を捕える事は叶わず、それどころか刀を持った左手で首元を掴まれていた。

男はスカリエッツィを地面に仰向けに叩きつけると、胸元に鞘を突き立てた。そしてゆっくりと鞘から刃を抜き放つ。

「私に従わなかった事を懺悔しろ。そして死んで逝け」

半月状に振り下ろされた刃はスカリエッツィの首を斬り落とした。切断面からは赤い液体が噴水の様に噴き出している。

「野垂れ死ね」

刀を鞘に戻すと吐き捨てる様に出た言葉と共にスカリエッツィを蹴り転がした。その時には既に、噴水の様だった血は収まっていた。

スカリエッツィの死亡によってフェイトを拘束していた魔法は解

け、彼女は自由の身となった。だがそれでもフェイトはその場から一歩も動けない。茫然としている彼女の横を男が通り過ぎていく。ハツとしたように我に返り、男に向かって叫ぶ。

「待て！何で殺した！いくら犯罪者だからといって」

「黙れ。許可は得ている」

「許可って・・・、誰に！」

「喚くな。貴様も懺滅してやるぞ」

「っ!？」

フェイトが男の姿を見失う事は無かった。しかし男は余りに速すぎる。その上突然過ぎた事もあり、フェイトは反応が遅れてしまった。

しかし感覚だけは彼女の反応について来ていたのか、漆黒の刃が自身掛けて迫って来るのがはっきりと見えていた。だが反応は出来ない。

『殺られる』と、フェイトは確信した。そんな確信は全然嬉しくないが、どうあがいても今の自分が迫る凶刃から逃げる術は無かった。

「.....」

「命拾いしたな」

フェイトの首元で凶刃は止まっていた。数秒という時間を掛けてフェイトは自分が殺されていない事を認識した。そのころには既に、男は刀を鞘に納めて歩きだしていた。

「どうして殺さなかった！」

「局員を懺滅する許可は得ていない」

「・・・」

今更ながらに襲ってくる恐怖にフェイトは、それ以上男に問う事は出来なかった。立ち去って行く男の背中を見つめるフェイトは、ただただこの男は危険すぎると思うことしかできなかった。

その後、エースたちと次元航行艦隊の活躍によってゆりかごは消

滅し、事件は解決された。

しかし事件解決の裏で起こった、謎の白髪の男によるスカリエツ
テイ一味の殺害という件に関しては決して表沙汰になる事は無かつ
た。

彼の者は何ものなのか、管理局に所属しているのか、それとも他
の組織に属しているのか。とにかく分からない事だらけだった。

分かっている事は、危険な男であるということ。それだけだった。

(後書き)

何となく石田さんが脳裏に浮かんだのでポケモンのバトルサブウエイをやる傍らで書いていました。

感想頂けるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0216o/>

君子殉凶リリカルBASARA

2010年10月9日01時23分発行